



「複合した地名」における連濁とアクセントの関係 ： 後部要素の分析（西光義弘教授還暦記念号）

保坂，華子

(Citation)

神戸言語学論叢, 5:51-67

(Issue Date)

2007-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001524>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001524>



「複合した地名」における連濁とアクセントの 関係 後部要素の分析

保坂 華子

東海大学

1. はじめに

AとBという2つの語あるいは形態素から複合名詞ABを作る際に、日本語の場合、音韻的には「連濁」(後部要素の初頭子音の有声化)と「アクセント構造の変化」(ABがアクセント句として1つにまとまる現象で、「複合語アクセント規則」と呼ばれ、ほとんどの複合語に起こる)が起こりうる(窪菌、1995:54, 58)。

この2つの音韻的な変化は双方とも、2つのAとBという要素を1つにまとめる、という役割を果たしている。アクセントが1つにまとまっていれば連濁が起こるとはいえないが、連濁が起こっていればアクセントは1つにまとまる、といわれている。この連濁とアクセントの変化は音声的かつ意味的に2つの要素を1つにまとめるだけでなく、それぞれコンテキストの中での「経済性」、つまり「言いやすさ」に貢献している。

日本語の複合語の音声的特徴に関しては先行研究もかなりあり、連濁現象の研究や複合語アクセントの研究も進んでいる。複合語におけるこの2つの現象については、佐藤(1989)で詳細に論じられているが、連濁とアクセントの関係は「まだ十分明らかにされているとはいえず、今後の研究に俟つべき点が多い」(262)。また、佐藤(1989)は、連濁やアクセントの性質は「広い言語事象と関わって」おり(263)、「従来、これらの規則は普遍的な一般則を見出すという立場で研究がなされてきた」が(264)、コンテキストとアクセント型・連濁の関係は語に依存していることもあり、「語彙規則として個別に明らかにしてゆくことが今後必要になるであろう」(264)とも述べている。

本稿では、コンテキストを「複合した地名」というジャンルの固有名詞に限定して、その後部要素に着目して、東京方言¹における「連濁」現象と「アクセントの変化」の関係を観察する。後部要素について、1) どんな条件の時に連濁が起こるのか、2) アクセントとの関係はどのようなになっているのか、を調べることを目的とする。

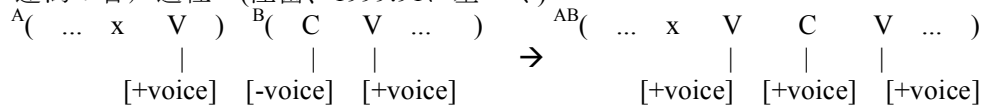
2. 「連濁」について

日本語の「連濁」という音韻現象は、AとBという2つの語から複合語ABが作られる過程において、Bの初頭の音節が清音から濁音に変わる現象、より詳しくいうと、その後部要素の最初の無声子音が前後の母音の有声性を獲得して有声化する同化現象であり、後部要素の形態音素交替と考えられる(cf. 窪菌、1999:4.2, Chapter 5)。したがって、連濁は文字・表記レベルの現象ではなく、第一義的には音韻レベルの変化である(窪菌、1999:113)。

日本語で濁音は表記上「^h」がついており、口語では「にごった音」と説明するが、音声学的には「有声の[= 声帯の振動を伴う]さまたげ音²(obstruents)[= /g/, /z/, /d/, /b/]ではじまる音節」である(上村、1989:50)。清音と濁音を音声素性に基づいて区別すると、清音は[-voice]、濁

音は[+voice]となる(窪菌、1999:90)。黒川(2004)の「音のクオリア」分析では、濁音/g/, /z/, /d/, /b/は「膨張+放出+振動」という発音構造をもち(134)、それぞれ対応する「清音の質を継承しつつ、ある物理効果を増強」する「ことばの強調関数」として機能している(98)³。歴史的にみると、同じ語の読みでも時代によって清濁は変化しているし(例 天下: てんか・てんが、地名の秦野: はたの・はだの)、地域により清濁が異なることもある(例 洗濯: 東日本の「せんたく」対 西日本の古い言い方「せんだく」)。古い日本語には濁音で始まる語はほとんどなかったし、濁音の生起は主に連濁現象と結びついていたが(51-52)、漢語や外来語の流入により濁音の使用度が増え、コンテキストの中での「言いやすさ」とも関係して現在のような連濁現象に至っている。

(1) 連濁の音声過程 (窪菌、1999:91に基づく)



(1)は、Vを母音、Cを子音とし、Aは前部要素、Bは後部要素、ABはそれらが複合語になった状態として、連濁の音声過程を一般化して音声素性に基づいて記述したものである⁴。

窪菌 (1995, 1999:Chapter 5) によると、連濁現象の特徴は(2)のようにまとめられる。

(2) 連濁現象の特徴 (窪菌、1995, 1999:Chapter 5)

- 1) 同化現象である。
- 2) 形態素+形態素のレベルで起こる。(アクセントのように語+語のレベルではない。)
- 3) 「複合語後部要素の初頭」という特定の音声環境においてのみ生起する。
- 4) 生起するかどうかの要因:
 - a. 語種

和語で最も起こりやすく、漢語では和語よりは起こりにくく、
外来語ではほとんど起こらない。
(日本語への定着度、なじみ度が高い、「和語らしい」(西野、2001)ほど
同化現象は起こりやすい。
[この傾向は複合名詞のアクセント構造でも当てはまる。(窪菌、1999:121)]
 - b. 後部要素の音韻構造

ライマンの法則(Lyman's Law):
「後部要素が既に濁音を含んでいる複合語では連濁は起こらない」
(後部要素が無声子音と対立する有声子音を含む場合に連濁の適用が阻止される。)
(窪菌、1999:123)
 - c. 複合語の意味構造

意味制約: 並列構造の複合名詞は連濁を起こしにくい。
 - d. 複合語の内部構造

(3要素以上からなる複合語での「左枝分かれ構造」対「右枝分かれ構造」に関して)
枝分かれ制約: 右枝分かれ構造は、連濁という音韻規則の適用を阻止する。
- 5) 複合語化するときに連濁する場合、複合語のアクセントもひとつにまとまる。
(アクセントがまとまる場合に必ずしも連濁が起こるわけではない。)

3. 「ライマンの法則」とその拡張

ライマンの法則(Lyman, 1894)は似通った特徴の音が近接することを嫌う異化現象の1つ(窪菌, 1999:124)で、濁音が同一要素内あるいはその「濁音の縄張り」内に複数生じることを避けようとする役割(126)を果たし、(2)において4)b.にまとめた。以下に、連濁規則とライマンの法則を整理する。

(3) 連濁規則とライマンの法則の比較

	規則特性	規則内容
連濁規則	任意的規則	$^A[\text{清}] + ^B[\text{清}] \rightarrow ^{AB}[[\text{清}] [\text{濁}]]$
ライマンの法則A	基本的法則	$^A[] + ^B[\text{清 濁}] \rightarrow ^{AB}[[] [\text{濁 濁}]]$
ライマンの法則B	Aの拡張	$^A[\text{濁}] + ^B[\text{清}] \rightarrow ^{AB}[[\text{濁}] [\text{濁}]]$

(3)から、複合語の構成要素間で連濁が起こるかどうかに基づいて、(4)のように4タイプに分類することができる。タイプ1と2は、(3)の連濁規則の適用・不適用に関する分類、タイプ3と4は、(3)のライマンの法則の適用・不適用に関する分類である。タイプ3・4のAとBは、(3)のライマンの法則A/Bに対応する。

(4) 複合語の構成要素間での連濁の生起に基づく4分類

	説明	タイプの特徴	例
タイプ1 (連濁規則適用)	連濁が生起しうる環境であり、実際に連濁を起こす	$^A[\text{清}] + ^B[\text{清}] \rightarrow ^{AB}[[\text{清}] [\text{濁}]]$	なかじま
タイプ2 (連濁規則不適用)	連濁が生起しうる環境であるが、連濁は起こしていない	$^A[\text{清}] + ^B[\text{清}] \rightarrow ^{AB}[[\text{清}] [\text{清}]]$	なかしま
タイプ3 (ライマンの法則適用)	連濁は生起しない環境であり、連濁は起こしていない	A $^A[] + ^B[\text{清 濁}] \rightarrow ^{AB}[[] [\text{濁 濁}]]$	なかふじ
		B $^A[\text{濁}] + ^B[\text{清}] \rightarrow ^{AB}[[\text{濁}] [\text{濁}]]$	ながしま
タイプ4 (ライマンの法則不適用)	連濁は生起しない環境であるにもかかわらず、連濁を起こす	A $^A[] + ^B[\text{清 濁}] \rightarrow ^{AB}[[] [\text{濁 濁}]]$	?
		B $^A[\text{濁}] + ^B[\text{清}] \rightarrow ^{AB}[[\text{濁}] [\text{濁}]]$	ながぶち

4. 連濁に関するライマンの法則と複合語アクセントの関係

これまで連濁現象に関して述べてきた。複合語アクセントは、連濁と同様、2つ以上の要素を複合語として1つにまとめる役割をする。複合語アクセント結合の基本規則を以下にまとめる。『NHK日本語発音アクセント辞典』(1998)に従い、○○○は前部要素(○=前部要

素のモーラ)、| はアクセント(この位置でピッチが下がる)を表し、後部要素はXXX(X=後部要素のモーラ)で表す。5.3以降の分析で使うアクセント型分類(同辞典の分類を拡張したもの)との対応も示す。

(5) 複合語名詞の基本的アクセント結合規則 (佐藤、1989に基づく)

	説明	代表的な複合語 アクセントの型	NHK アクセント 型分類	例
自立語+接辞	前部要素の最終音節にアクセントがくる	○○○ XX	B型	さいたま けん
	複合後、平板アクセントにする	○○○ XXX	Flat型	ちゅうごくご
自立語+自立語	後部要素が平板型・尾高型の時、後部要素の第1モーラにアクセント核がくる	○○○ X XX	A型	とくがわじ だい
	後部要素が中高型・頭高型の時、後部要素のアクセントを保持する	○○○ X XX	A型	りゅうこうか しゅ
音韻規則	アクセント結合後、アクセント核をとれない・とりにくい音にきたアクセントは、原則として前後に1モーラずれる	○○ ○ XXX ○○○ XX X等 (←○○○ XXX)	B*型 A*型	しぜ んかい (←しぜん かい)

本稿の目的は複合語地名における「連濁」現象と「アクセントの変化」の関係を後部要素に着目して観察することであるから、簡単に連濁現象(ライマンの法則を含む)と複合語アクセントの関係をまとめておく。

(6) ここまでで分かっている連濁現象(ライマンの法則を含む)と複合語アクセントの関係

連濁とアクセントの変化

共通点:

音声的かつ意味的に2つの要素を1つにまとめる。

コンテキストの中での「経済性」(「言いやすさ」)に貢献している。

連濁に関するライマンの法則と複合語アクセントの関係(窪菌、1999:128)

共通点:

「ある原語特徴の縄張りに関する異化現象」

(「その言語特徴が一定の範囲内に複数現れることを避けようとする」)

相違点:

対象となる言語特徴の違い

「縄張りの範囲」

5. 「複合した地名」の発音とアクセント

以上のことをふまえ、『NHK日本語発音アクセント辞典』(1998:付録15-27)(以降、「アクセント辞典」と呼ぶ)に列挙・分類されている「複合した地名」について連濁の生起状況と

アクセントを調べる。本稿では、「アクセント辞典」掲載の「複合した地名」を構成する後部要素に注目して観察する。(前部要素との関係などについては、今後の課題となろう。)この辞典では共通語のアクセントを扱い、地名のうち〇〇県、〇〇市などの「複合した地名」は(前部要素に関わらず)規則的なアクセントを持っているとしてまとめて扱い、後部要素ごとに分類している。ここで挙げられている後部要素(複合して「地名」という固有名詞を構成する後部要素)には、それぞれそのアクセントとカタカナによる読み方が明記してあるため、共通語アクセントにおける比較的固定した読み方、アクセントが抽出できると考えられる。

佐藤(1989:236)によると、「複合語では後に付く語のアクセントの性質によって、全体のアクセントが決まるという一般的特性がある」。また、窪菌(1995:58)によれば、「東京方言の複合名詞に話を限定すると、そのアクセント型を決定するのは後部要素(=右側要素)の音韻構造である」し、同アクセント辞典でも、「複合名詞のアクセントは、後部要素によって決まるものが多い」ので、「後部要素の同一の複合名詞をそれぞれ一括し」て扱っている(同付録30)ことからしても、妥当なアプローチといえる。

5.1. 観察対象

分類・記載されている「複合した地名」の後部要素は、読み方で数えてのべ88要素あった。それらは、連濁の可能性の有無に関して(7)のようにまとめられる。あ行、な行、ま行、や行、ら行、わ行は清濁の対立がないため、連濁の生起とは関係ない要素である。また、[(の)たき(一の滝)]については「のたき」が一つの要素として整理されていることから、な行として分類しうるため、連濁とは関わらない要素である。したがって、連濁と関係しうる要素は清濁の対立のある音で始まるものであるから、本稿の観察対象は(7)で「連濁可」とした67要素である。この67要素について分析を試みる。

(7) 「アクセント辞典」掲載の「複合した地名」の後部要素リスト

連濁の可否	該当行	該当する後部要素
連濁可	か行	かい(海)、かいきょー(海峡)、がた(潟)、かわ・がわ(川)；きゅーりょー(丘陵)、きょー(峡)、きょー(橋)；く(区)、ぐん(郡)；けい(溪)、けいこく(溪谷)、けいりゅー(溪流)、けん(県)；こ(湖)、ごえ(越)、こーえん(公園)、こーげん(高原)、こーせん(鉱泉)、こーち(高地)
	さ行	さき・ざき(崎)、ざき(埼)、ざき(岬)、さん・ざん(山)、さんかい(山塊)、さんち(山地)、さんみやく(山脈)；し(市)、しちょう(支庁)、しま・じま(島)、しゅー(州)、しょーにゅーどー(鍾乳洞)、しょーとー(諸島)；すいどう(水道)；せき(関)、せと(瀬戸)、せん・ぜん(山)
	た行	たい(平)、だい(台)、だいち(台地)、だいら(平)、たけ・だけ(岳)、たに・だに(谷)、だむ(ダム)；ちょすいち(貯水池)；とー(島)、どー(洞)、とーげ(峠)
	は行	ばい(原)、ばし(橋)、はな・ばな(鼻)、はな(岬)、はま(浜)、はら・ばら(原)、ばる(原)、はんとー(半島)；へいや(平野)；ぼくじょー(牧場)、ぼんち(盆地)
連濁不可	あ行	いけ(池)；うみ(海)、うら(浦)、うんが(運河)；えき(駅)、えん(園)；おーしま(大島)
	な行	なだ(灘)；ぬま(沼)；の(野)、(の)たき(一の滝)
	ま行	みさき(岬)、みさき(御碕)、みなと(港)、みね(峰)；もり(森)
	や行	やま(山)；よー(洋)

	ら行	れい(嶺)、れっとう(列島)
	わ行	わん(湾)

内訳は、1漢字からなるものが61、2漢字以上からなるのが26、外来語が1（ダムのみ）である。同じ漢字で全く別の読みをするものには「海（うみ、かい）」「橋（きょー、ばし）」「岬（さき、はな、みさき）」「山（さん・ざん、せん・ぜん、やま）」「島（しま・じま、とー）」「平（たい、だいら）」「原（ばい、はら・ばら、ばる）」の7漢字、21要素ある。また、同じ漢字で実際の読みに清濁のバリエーションがあるのは「川（かわ・がわ）」「崎（さき・ざき）」「山（さん・ざん）」「島（しま・じま）」「山（せん・ぜん）」「岳（たけ・だけ）」「谷（たに・だに）」「鼻（はな・ばな）」「原（はら・ばら）」の9対である。67の「複合した地名」の後部要素をモーラ数と漢字数別に分類すると、(8)のようになる。

(8) 分析対象となった67の「複合した地名」の後部要素に関する基礎分析
（モーラ数と漢字数） {注： 各類内50音順、だむ（ダム）を除く}

		漢字数		
		1	2	3
モーラ数	1	く(区)、こ(湖)；し(市)		
	2	かい(海)、がた(潟)、かわ・がわ(川)、きょー(峡)、きょー(橋)、ぐん(郡)、けい(溪)、けん(県)、ごえ(越)；さき・ざき(崎)、ざき(埼)、ざき(岬)、さん・ざん(山)、しま・じま(島)、しゅー(州)、せき(関)、せん・ぜん(山)；たい(平)、だい(台)、たけ・だけ(岳)、たに・だに(谷)、とー(島)、どー(洞)；ばい(原)、ばし(橋)、はな・ばな(鼻)、はな(岬)、はま(浜)、はら・ばら(原)、ばる(原)	せと(瀬戸)	
	3		こーち(高地)；さんち(山地)、しちよう(支庁)、しょとー(諸島)；だいち(台地)、だいら(平)、とーげ(峠)；へいや(平野)、ぼんち(盆地)	
	4		かいきょー(海峡)、きゅーりょー(丘陵)、けいこく(溪谷)、けいりゅー(溪流)、こーえん(公園)、こーげん(高原)、こーせん(鉱泉)；さんかい(山塊)、さんみゃく(山脈)、すいどう(水道)；はんとー(半島)、ぼくじょー(牧場)	ちよすいち(貯水池)
	6			しよーにゅーどー(鍾乳洞)

5.2. 後部要素の分析 1 : 「連濁」現象に関して

分析対象となった67の「複合した地名」の後部要素を、「連濁」現象との関連で分析したのが(9)である。

(9) 67の「複合した地名」の後部要素と「連濁」現象 (漢字数順・モーラ数順・50音順)

後部要素 (漢字) : 後部要素を漢字で表記したもの

後部要素 (読み) : その要素が「複合した地名」を構成したときの読み (濁音は太字体表記)

モーラ数 : 後部要素のモーラ数

漢字数 : 後部要素を構成する漢字数

複合後の初頭子音 : 後部要素の初頭の子音 (参考として、後続の母音も記載する)

複合前の初頭子音 : 後部要素が複合する前、単独で読まれるときの初頭子音

連濁 : 後部要素が前部要素と複合した際に連濁するか否か (y=連濁する、n=連濁しない)

濁音の有無 : 後部要素が複合する前、単独で読まれるときに濁音があるか否か

後部要素 (漢字)	後部要素(読み)	モーラ 数	漢字 数	複合後 の初頭 子音	複合前 の初頭子 音	連 濁	濁音 の有 無
ダム	だむ	2	*	d-a	d-a	n	y
区	く	1	1	k-u	k-u	n	n
湖	こ	1	1	k-o	k-o	n	n
市	し	1	1	sh-i	sh-i	n	n
海	かい	2	1	k-a	k-a	n	n
峡	きょー	2	1	ky-o	ky-o	n	n
橋	きょー	2	1	ky-o	ky-o	n	n
溪	けい	2	1	k-e	k-e	n	n
県	けん	2	1	k-e	k-e	n	n
州	しゅー	2	1	sh-u	sh-u	n	n
関	せき	2	1	s-e	s-e	n ⁵	n
平	たい	2	1	t-a	t-a	n	n
島	とー	2	1	t-o	t-o	n	n
岬	はな	2	1	h-a	h-a	n	n
浜	はま	2	1	h-a	h-a	n	n
郡	ぐん	2	1	g-u	g-u	n	y
台	だい	2	1	d-a	d-a	n	y
洞	どー	2	1	d-o	?d-o ⁶	n	?y
原	ばい	2	1	b-a	?h-a ⁷	?y	?n
原	ばる	2	1	b-a	?h-a ⁸	?y	?n
潟	がた	2	1	g-a	k-a	y	n
越	ごえ	2	1	g-o	k-o	y	n
埼	ざき	2	1	z-a	s-a	y	n
岬	ざき	2	1	z-a	s-a	y	n
橋	ばし	2	1	b-a	h-a	y	n
川	かわ・がわ	2	1	k/g-a	k-a	y/n	n
崎	さき・ざき	2	1	s/z-a	s-a	y/n	n
山	さん・ざん	2	1	s/z-a	s-a	y/n	n
島	しま・じま	2	1	sh/z-i	sh-i	y/n	n
山	せん・ぜん	2	1	s/z-e	s-e	y/n	n

岳	たけ・だけ	2	1	t/d-a	t-a	y/n	n
谷	たに・だに	2	1	t/d-a	t-a	y/n	n
鼻	はな・ばな	2	1	h/b-a	h-a	y/n	n
原	はら・ばら	2	1	h/b-a	h-a	y/n	n
峠	とーげ	3	1	t-o	t-o	n	y
平	だいら	3	1	d-a	t-a	y	n
瀬戸	せと	2	2	s-e	s-e	n	n
高地	こーち	3	2	k-o	k-o	n	n
山地	さんち	3	2	s-a	s-a	n	n
支庁	しちょう	3	2	sh-i	sh-i	n	n
諸島	しょとー	3	2	sh-o	sh-o	n	n
台地	だいち	3	2	d-a	d-a	n	y
平野	へいや	3	2	h-e	h-e	n	n
盆地	ぼんち	3	2	b-o	b-o	n	y
海峡	かいきょー	4	2	k-a	k-a	n	n
丘陵	きゅーりょー	4	2	ky-u	ky-u	n	n
溪谷	けいこく	4	2	k-e	k-e	n	n
溪流	けいりゅー	4	2	k-e	k-e	n	n
公園	こーえん	4	2	k-o	k-o	n	n
高原	こーげん	4	2	k-o	k-o	n	y
鉱泉	こーせん	4	2	k-o	k-o	n	n
山塊	さんかい	4	2	s-a	s-a	n	n
山脈	さんみやく	4	2	s-a	s-a	n	n
水道	すいどう	4	2	s-u	s-u	n	y
半島	はんとー	4	2	h-a	h-a	n	n
牧場	ぼくじょー	4	2	b-o	b-o	n	y
貯水池	ちょすいち	4	3	ch-o	ch-o	n	n
鍾乳洞	しょーにゅーどー	6	3	sh-o	sh-o	n	y

(9)をもとに、分析対象の67要素を連濁に関して分類してみよう。

1漢字1モーラの3要素には、複合前から濁音も含まれず、連濁を起こすものはなかった。

2モーラのものは32要素あり（「せと」「だむ」以外はすべて1漢字）、うち複合前には濁音を含まないものは28要素、含むものは4要素である。後者の4要素（だむ、ぐん、だい、どー）はいずれも、初頭音が濁音をとり、「だむ」は英語のdamに由来する外来語、後の3つは漢語である。これら4要素は、連濁には関係せず、複合前後とも初頭に濁音をとる。

1漢字2モーラで、複合前には濁音を含まない27要素のうち、11要素はもともと濁音を持たず、連濁も起こさない。1漢字2モーラで拗音を含む3要素（きょー、きょー、しゅー）はいずれも漢語でこの類に入っていた。また、「かい」や「とー」などの音読みされた要素が多くを占めている。長音を含む後部要素は連濁しにくいことも考えられる。

1漢字2モーラで、残る16要素についてははすべてもともと濁音を含まず、連濁を起こす、あるいは連濁を起こすケース、起こさないケースの両方があるものであった。前者は7要素、後者は9要素である。

1漢字3モーラのものは2要素（とーげ、だいら）しかない。「とーげ」はもともと濁音があり、連濁は起こさない（(4)ではタイプ3のケース）のに対して、「だいら」は本来「たいら」でもともと濁音はなく、連濁している。

2漢字から成るものには、2モーラ1要素（せと）、3モーラ7要素、4モーラ12要素ある。また、3漢字から成るものは2要素しかなく、3漢字4モーラの「ちょすいち」、6モーラの「しょーにゅーどー」である。これら2漢字以上の22要素については、うち6要素がもともと濁音

を含んでいる漢語で、複合前に濁音を含むか否かに関わらず、すべて連濁は起こさない。これは、これらが漢語であり、漢字2字以上のものには例外が少ないことを示唆している。

(10) (9)のまとめ: 「連濁」現象からみた「複合した地名」の後部要素の分類

(ただし、67要素中「しま・じま」のような連濁の生起、不生起両方ある9対については計算上1要素のペアとしたため、総計は58要素となっている。)

漢字数	モーラ数	複合前の「濁音」		複合後の「連濁」		
		あり	なし	YES	YES&NO	NO
	2 モーラ	1				1
1 漢字	1 モーラ		3			3
	2 モーラ	3	27	7	9	14
	3 モーラ	1	1	1		1
2 漢字	2 モーラ		1			1
	3 モーラ	2	5			7
	4 モーラ	3	9			12
3 漢字	4 モーラ		1			1
	6 モーラ	1				1
		11	47	8	9	41

(10)のように、連濁が起こっているのは67要素のうち17要素 (25.4%) [「複合後の「連濁」」がYESとYES&NOの合計]である。それらは、1漢字2モーラ、3モーラの要素のみであった。1漢字2モーラで連濁を起こすものは30要素中16 (53.3%)、1漢字3モーラでは2要素中1 (50%)である。(2)の4) 生起するかどうかの要因 (語種について) 一和語で最も起こりやすく、漢語では和語よりは起こりにくく、外来語ではほとんど起こらないこと一を考慮すると、固有名詞であっても、外来語である「ダム」や2漢字以上から成る後部要素については連濁が起こりにくいと考えられる。また、拗音を含む後部要素については連濁を起こしているものが見られなかった。これは、「拗音は漢語を通じて日本語に入ってきた音と言われている」(窪 蘭、1999:119)ので、おそらく同じ語種の問題と関わっているものと考えられる。連濁の内訳は、後部要素の初頭子音の変化がk → gが3要素、s/sh → zが6要素、t → dが3要素、h → bが5要素となっている。これは、連濁が起こりうるか行、さ行、た行、は行いずれにも連濁が起こっていることを示している。これらの連濁の生起する17後部要素に関しては、5.4で詳しく分析する。

5.3. 後部要素の分析2：「アクセントの変化」と「連濁」現象

分析対象となった67の「複合した地名」の後部要素を、「アクセントの変化」について「連濁」現象との関連で分析したのが(12)である。ここでは、複合名詞のアクセントの表記は「アクセント辞典」に従う[(5)で既に参照した通り]。○○○は前部要素(○＝前部要素のモーラ)、]はアクセント(この位置でピッチが下がる)を表し、後部要素はXXX(X＝後部要素のモーラ)で表すこととする。

同「アクセント辞典」によると、「複合名詞は、規則的なアクセントを持っているものが多い」(付録30)として、アクセントの型をA型、B型、B*型に分類している。それに、A*型としてA型に近い例外、平板型としてFlatを加えて、(11)の5つのアクセント型に分類する。

(11) 「アクセント辞典」によるアクセント型分類

- A型： ○○○ X] XX (後部要素の第1拍まで高い型)
 A*型： ○○○ XX] X, etc. (後部要素の第1拍以降にアクセントがある型)
 B型： ○○○] XX (前部要素の最終拍まで高い型)
 B*型： ○○] ○ XX (前部要素の最終拍の前まで高い型)
 Flat型： ○○○ XXX (平板型)

(12) 67の「複合した地名」の後部要素に関するアクセントの分析—連濁の生起との比較

後部要素(漢字)：後部要素を漢字で表記したもの

後部要素(読み)：その要素が「複合した地名」を構成したときの読み(濁音は太字体表記)

モーラ数：後部要素のモーラ数

漢字数：後部要素を構成する漢字数

複合後の初頭子音：後部要素の初頭の子音(参考として、後続の母音も記載する)

複合前の初頭子音：後部要素が複合する前、単独で読まれるときの初頭子音

連濁：後部要素が前部要素と複合した際に連濁するか否か(y＝連濁する、n＝連濁しない)

複合前のアクセント：後部要素が複合する前のアクセント

複合後のアクセント・アクセント型：後部要素が複合した時のアクセント(型)(辞典準拠)

後部要素 (漢字)	後部要素 (読み)	モーラ数	漢字数	複合後 初頭子音	複合前 初頭子音	連濁	複合前の アクセント	複合後の アクセント	アクセント型
ダム	だむ	2	*	d-a	d-a	n	ダ] ム	○○○ ダ] ム	A
区	く	1	1	k-u	k-u	n	ク]	○○○] ク	B
湖	こ	1	1	k-o	k-o	n	?	○○○] コ	B
市	し	1	1	sh-i	sh-i	n	シ]	○○○] シ	B
海	かい	2	1	k-a	k-a	n	?	○○○] カイ	B
溪	けい	2	1	k-e	k-e	n	?	○○○] ケイ	B
県	けん	2	1	k-e	k-e	n	ケ] ン	○○○] ケン	B
州	しゅー	2	1	sh-u	sh-u	n	シュ] ー	○○○] シュー	B
関	せき	2	1	s-e	s-e	n	セ] キ	○○○] セキ	B
平	たい	2	1	t-a	t-a	n	?	○○○] タイ	B
岬	はな	2	1	h-a	h-a	n	?	○○○] ハナ	B
浜	はま	2	1	h-a	h-a	n	ハマ]	○○○] ハマ	B
郡	ぐん	2	1	g-u	g-u	n	グ] ン	○○○] グン	B
台	だい	2	1	d-a	d-a	n	ダ] イ	○○○] ダイ	B

洞	どー	2	1	d-o	?d-o ⁹	n	?	○○○ ドー	B
原	ばい	2	1	b-a	?h-a ¹⁰	?y	?	○○○ バイ	B
原	ばる	2	1	b-a	?h-a ¹¹	?y	?	○○○ バル	B
潟	がた	2	1	g-a	k-a	y	カタ	○○○ ガタ	B
埼	ざき	2	1	z-a	s-a	y	?	○○○ ザキ	B
岬	ざき	2	1	z-a	s-a	y	?	○○○ ザキ	B
橋	ばし	2	1	b-a	h-a	y	ハシ	○○○ バシ	B
崎	さき・ざき	2	1	s/z-a	s-a	y/n	?	○○ サキ; ○○○ ザキ	B
山	さん・ざん	2	1	s/z-a	s-a	y/n	?	○○ サン; ○○○ ザン	B
山	せん・ぜん	2	1	s/z-e	s-e	y/n	?	○○ セン; ○○○ ゼン	B
岳	たけ・だけ	2	1	t/d-a	t-a	y/n	?	○○ タケ; ○○○ ダケ	B
鼻	はな・ばな	2	1	h/b-a	h-a	y/n	ハナ	○○ ハナ; ○○○ バナ	B
原	はら・ばら	2	1	h/b-a	h-a	y/n	ハ ラ	○○ ハラ; ○○○ バラ	B
谷	たに・だに	2	1	t/d-a	t-a	y/n	タニ	○○ タニ; ○○○ ダニ	B; Flat
川	かわ・がわ	2	1	k/g-a	k-a	y/n	カワ	○○ カワ; ○○ ガワ、 ○○○ ガワ	B; Flat, B
峡	きょー	2	1	ky-o	ky-o	n	?	○○○ キョー	Flat
橋	きょー	2	1	ky-o	ky-o	n	?	○○○ キョー	Flat
島	とー	2	1	t-o	t-o	n	?	○○○ トー	Flat
越	ごえ	2	1	g-o	k-o	y	(コエル)	○○○ ゴエ	Flat
島	しま・じま	2	1	sh/z-i	sh-i	y/n	シマ	○ シマ、 ○○ シマ; ○○○ ジマ	Flat, B; Flat
平	だいら	3	1	d-a	t-a	y	タイラ	○○○ ダ イラ	A
峠	とーげ	3	1	t-o	t-o	n	トーゲ	○○○ ト ーゲ	A
瀬戸	せと	2	2	s-e	s-e	n	セ ト	○○○ セ ト	A
高地	こーち	3	2	k-o	k-o	n	コ ーチ	○○○ コ ーチ	A
山地	さんち	3	2	s-a	s-a	n	サ ンチ	○○○ サ ンチ	A
諸島	しょとー	3	2	sh-o	sh-o	n	ショ トー	○○○ ショ トー	A
台地	だいち	3	2	d-a	d-a	n	ダイチ、 ダ イチ	○○○ ダ イチ	A
平野	へいや	3	2	h-e	h-e	n	ヘイヤ	○○○ ヘ イヤ	A
盆地	ぼんち	3	2	b-o	b-o	n	ボンチ	○○○ ボ ンチ	A
支庁	しちょう	3	2	sh-i	sh-i	n	シチョ ー、 シ チョー	○○○ シチョ ー	A*
海峡	かいきょー	4	2	k-a	k-a	n	カイキョー	○○○ カ イキョー	A
丘陵	きゅーりょー	4	2	ky-u	ky-u	n	キューリョー	○○○ キュ ーリョー	A
溪谷	けいこく	4	2	k-e	k-e	n	ケイコク	○○○ ケ イコ ク	A
溪流	けいりゅー	4	2	k-e	k-e	n	ケイリユー	○○○ ケ イリユー	A
公園	こーえん	4	2	k-o	k-o	n	コーエン	○○○ コ ーエン	A

高原	こーげん	4	2	k-o	k-o	n	コーゲン	〇〇〇 コ ーゲ ン	A
鉱泉	こーせん	4	2	k-o	k-o	n	コーセン	〇〇〇 コ ーセ ン	A
山塊	さんかい	4	2	s-a	s-a	n	サンカイ	〇〇〇 サ ンカ イ	A
山脈	さんみゃく	4	2	s-a	s-a	n	サンミャク	〇〇〇 サ ンミャク	A
水道	すいどう	4	2	s-u	s-u	n	スイドー	〇〇〇 ス イド ー	A
半島	はんとー	4	2	h-a	h-a	n	ハントー	〇〇〇 ハ ント ー	A
牧場	ぼくじょー	4	2	b-o	b-o	n	ボクジョー	〇〇〇 ボ クジョー	A
貯水池	ちょすいち	4	3	ch-o	ch-o	n	チョス イ チ	〇〇〇 チョス イチ	A*
鍾乳洞	しゅーにゅー どー	6	3	sh-o	sh-o	n	ショーニュ (l)ーどー	〇〇〇 ショーニ ュ (l)ーどー	A*/ Flat

(12)をもとに、分析対象の67要素をアクセントに関して連濁との関係を分類してみる。

2モーラの外来語「だむ」は、複合前後ではアクセント型を変えず、A型 〇〇〇 X| Xをとる。複合によって、連濁も起こさない。

1漢字1モーラの3要素は、複合する前にはX| が多いようであるが、複合後にはB型 〇〇〇 | Xをとり、連濁を起こすものはなかった。

1漢字2モーラのものは30要素あり、複合する前のアクセント型はバラバラであるが、複合後にはB型 〇〇〇 | XXをとるものが多く(23要素)、もしくは平板型 〇〇〇 XX (4要素)かB型と平板型両方(3要素)となる。1漢字2モーラの後部要素では、複合前のアクセントに関わらず、B型がデフォルトであると考えられる。複合前には濁音を含む3要素(ぐん、だい、どー)はいずれもB型であり、含まない27要素についての内訳がB型のみ(20要素)と平板型のみ(4要素)、B型・平板型(3要素)である。

連濁との関係では、連濁を起こさない1漢字2モーラの14要素については、うち11要素がB型、3要素が平板型となっている。前者には、複合前には濁音を含む3要素(ぐん、だい、どー)や拗音を含む「しゅー」が含まれ、後者には拗音を含む2要素(きょー、きょー)と「とー」が含まれる。

残る16の1漢字2モーラの要素についてはすべてもともと濁音を含まないもので、連濁を起こす7要素、あるいは連濁を起こすケース、起こさないケースの両方がある9要素である。前者については、B型が優勢で7要素中の6、残る1要素「ごえ」は平板型である。[o]音を初頭音にとる後部要素では、複合した時に平板型アクセントを取りやすい傾向があるようである(きょー、きょー、とー、ごえ)。

1漢字3モーラ、2漢字以上から成る後部要素については、複合してB型になるものは一切なく、原則としてすべてA型、あるいはA*型(A型の変型と考えられる)となる。(ただし、3漢字6モーラの「しゅーにゅーどー」については、A*型および平板型があるが、「複合した地名」を作る後部要素としては88要素中最長のもので例外性が強い可能性が高い。) 2漢字4モーラの12要素は、複合する前にはすべて平板型のアクセントをとるが、複合してA型となる。A*型をとる3要素は「しちゅー」、「ちょすいち」、「しゅーにゅーどー」で、複合前のもともとのアクセントを保持したものと考えられる。「アクセント辞典」が「漢字2字以上のものはアクセントの例外が少ない」(付録30)と述べていることを支持する結果である。また、外来語、1漢字3モーラ、2漢字以上の後部要素についてA型またはA*型になるという傾向は、複合前に

濁音を含むか否かに関わらないし(だむ、とーげ、だいち、ぼくじょー等)、連濁するか否かにも関わらない(だいら)。

- (13) (12)のまとめ:「複合した地名」の後部要素における複合後のアクセントと連濁の分類
(ただし、67要素中「しま・じま」のような連濁の生起、不生起両方ある9対については計算上1要素のペアとしたため、総計は58要素となっている。この表では、ある要素が二通り以上のアクセント型をとりうる場合、両方カウントに入れた。)

漢字 数	モーラ 数	複合後のアクセント					複合後の「連濁」		
		A	A*	B	B*	Flat	YES	YES&NO	NO
	2 モーラ	1							1
1 漢字	1 モーラ			3					3
	2 モーラ			26		7	7	9	14
	3 モーラ	2					1		1
2 漢字	2 モーラ	1							1
	3 モーラ	6	1						7
	4 モーラ	12							12
3 漢字	4 モーラ		1						1
	6 モーラ		1			1			1
		22	3	29	0	8	8	9	41

(13)は、「複合した地名」の後部要素について、複合後のアクセントと連濁の生起状況を比較したものである。(10)で調べたように、連濁が起こっている17要素 (67要素中、25.4%—表中の「複合後の「連濁」」のYESとYES&NOの合計)は、すべて1漢字2モーラもしくは3モーラの要素である。複合後のアクセントについては、1漢字1モーラ、2モーラの後部要素にB型が優勢で、その他は平板型、B型・平板型共起となっている。一方、1漢字1モーラ、2モーラの後部要素以外、すなわち外来語2モーラ、1漢字3モーラ、2漢字以上の後部要素では、3漢字6モーラの「しょーにゅーどー」のA*型・平板型共起を例外とすれば、すべてA型かA*型となっている。(連濁の生起する17後部要素に関しては、4.4で「アクセントの変化」と合わせて詳しく分析する。)

したがって、「複合した地名」というジャンルに特定して調べた結果、語種としては、漢語や外来語の後部要素では複合してからのアクセントがA型系をとり、連濁も起こしにくいことが分かる。また、和語の後部要素ではB型のアクセントをとりやすく、連濁も起こしやすい。ただし、「連濁」現象の生起しやすさと複合した後のアクセントの型は 完全に一致するわけではない。1漢字2モーラのものについては、連濁を起こしやすく(30要素中16、53.3%)、

B型に代表されるA型系以外のアクセントをとる。しかし、連濁が生じうる1漢字3モーラ(2要素中1、50%)では、A型のアクセントをとる。また、1漢字1モーラの要素については、連濁しないが、B型のアクセントとなっている。つまり、傾向としては「複合後のアクセント」の分布と「連濁の生起状況」は似ているが、1漢字からなる後部要素の中でそれらが一致していないのである。これをまとめると、次の(14)のようになる。

(14) 「複合した地名」の後部要素における、「複合後アクセント」と「連濁生起状況」の関係と傾向

漢字数	モーラ数	複合後のアクセント	複合後の「連濁」の生起状況
1 漢字	1 モーラ	B型優勢	
	2 モーラ		生起しやすい
	3 モーラ		
外来語	2 モーラ	A型系優勢	
2 漢字	2 モーラ		
	3 モーラ		
	4 モーラ		
3 漢字	4 モーラ		
	6 モーラ		

5.4. 連濁しうる後部要素の分析

(9)と(12)の2表をもとに、連濁を起こす17の後部要素について、モーラ数、漢字数、複合前後の初頭子音、複合前後の濁音の有無と連濁の生起、複合前後のアクセントをまとめたものが(15)である。

(15) 連濁の生起する「複合した地名」の17後部要素の分析: 連濁の生起とアクセント

モーラ数: 後部要素のモーラ数

漢字数: 後部要素を構成する漢字数

後部要素(漢字): 後部要素を漢字で表記したもの

後部要素(読み): その要素が「複合した地名」を構成したときの読み(濁音は太字体表記)

初頭子音(複合前): 後部要素が複合する前、単独で読まれるときの初頭子音

初頭子音(複合後): 後部要素の初頭の子音(参考として、後続の母音も記載する)

濁音(複合前): 後部要素が複合前、単独で読まれるときに濁音があるか(y=あり、n=なし)

連濁(複合後): 後部要素が前部要素と複合して連濁するか(y=連濁する、n=連濁しない)

複合前のアクセント: 後部要素が複合する前のアクセント

複合後のアクセント・アクセント型: 後部要素が複合した時のアクセント(型)(辞典準拠)

モーラ数	漢字数	後部要素(漢字)	後部要素(読み)	初頭子音(前)	初頭子音(後)	濁音(前)	連濁(後)	複合前のアクセント	複合後のアクセント	アクセント型(後)
2	1	原	ばい	?h-a ^{1 2}	b-a	?n	?y	?ハ]ラ	〇〇〇]バイ	B
2	1	原	ばる	?h-a ^{1 3}	b-a	?n	?y	?ハ]ラ	〇〇〇]バル	B
2	1	潟	がた	k-a	g-a	n	y	カタ]	〇〇〇]ガタ	B
2	1	埼	ざき	s-a	z-a	n	y	?	〇〇〇]ザキ	B
2	1	岬	ざき	s-a	z-a	n	y	?	〇〇〇]ザキ	B

2	1	橋	ばし	h-a	b-a	n	y	ハシ]	〇〇〇] バシ	B
2	1	崎	さき・ざき	s-a	s/z-a	n	y/n	?	〇〇] サキ; 〇〇〇] ザキ	B
2	1	山	さん・ざん	s-a	s/z-a	n	y/n	?	〇〇] サン; 〇〇〇] ザン	B
2	1	山	せん・ぜん	s-e	s/z-e	n	y/n	?	〇〇] セン; 〇〇〇] ゼン	B
2	1	岳	たけ・だけ	t-a	t/d-a	n	y/n	?	〇〇] タケ; 〇〇〇] ダケ	B
2	1	鼻	はな・ばな	h-a	h/b-a	n	y/n	ハナ	〇〇] ハナ; 〇〇〇] バナ	B
2	1	原	はら・ばら	h-a	h/b-a	n	y/n	ハ] ラ	〇〇] ハラ; 〇〇〇] バラ	B
2	1	谷	たに・だに	t-a	t/d-a	n	y/n	タニ]	〇〇] タニ; 〇〇〇] ダニ	B; Flat
2	1	川	かわ・がわ	k-a	k/g-a	n	y/n	カワ]	〇〇] カワ; 〇〇 ガワ、 〇〇〇] ガワ	B; Flat, B
2	1	越	ごえ	k-o	g-o	n	y	(コエル)	〇〇〇] ゴエ	Flat
2	1	島	しま・じま	sh-i	sh/z-i	n	y/n	シマ]	〇 シマ、 〇〇] シマ; 〇〇〇] ジマ	Flat, B; Flat
3	1	平	だいら	t-a	d-a	n	y	タイラ	〇〇〇ダ] イラ	A

(15)から、連濁が起こる・起こりやすい条件を考えてみよう。(15)で扱った17の後部要素に共通する特徴をまとめる。

まず、モーラ数と漢字数に関しては、17要素とも1漢字から成り、3モーラである「だいら」1つを除いてはすべて2モーラである。語種は和語か「和語らしい」語で、複合した地名として既に長く使われており、なじみ度、定着度が高い複合例をもつものが多い。

また、複合する前に濁音が含まれるかどうかをみると、17要素すべてが濁音を含まないものであり、複合して連濁を起こしていることが分かる。ただし、本稿では前部要素との関係については詳しく調べないので、3. でふれた連濁規則やライマンの法則にかかわるタイプ1(連濁が生じうる環境であり、実際に連濁を起こす)とタイプ4(連濁は生じない環境であるにもかかわらず、連濁を起こす)の区別はできない。

複合前と後の後部要素初頭音については、初頭子音の変化がk → g (か行) が3要素、s/sh → z (さ行) が6要素、t → d (た行) が3要素、h → b (は行) が5要素となっている。初頭子音に続く母音には圧倒的に [a]音が多い(17中14要素)。

アクセントとの関係を見てみよう。複合してできた複合名詞としてのアクセント型は、連濁の生じうるこの17要素については連濁するかしないかに関わらず「B型」(例: 〇〇〇] ガワ)が多い。(「アクセント辞典」による表記に従う。) 連濁すると「平板型」(例: 〇〇〇 ジマ)をとるものも少なくない。それと比べると「A型」をとるものは1漢字3モーラで連濁を起こす「だいら」(〇〇〇 ダ] イラ)しかなかった。

複合する前、すなわち単独で発音された場合のアクセントは、「アクセント辞典」には記載されていないものもあったが、〇] 〇、〇〇]、〇〇、〇〇〇 の型が比較的偏りなくみられた。このことは、複合する前のもとのアクセント型に関係なく、できた複合名詞としてのアクセントには「B型」が優勢であることを示している。

「アクセント辞典」による複合名詞のアクセント表記によらずにみると、連濁しうるこれらの後部要素の複合後のアクセント型は、一部の例外を除いて 〇〇〇]XXか〇〇〇 X]

XX (○=前部要素のモーラ、X=後部要素のモーラ)となる。これらの2つのアクセント型は、前者が「アクセント辞典」での「B型」、後者が「A型」であり、一見異質のものに見える。しかし、語末から3モーラめの後ろにアクセントがくるという点では共通である。

原則的に「語末から3モーラめの後ろにアクセントがくる」ことは、複合する前のもとのアクセント型にもかかわらないようである。この原則にあてはまらないものは、○○○ ダニ、○○ ガワ、○○○ ゴエ、○○○ ジマ、○○ シマの5つ (うち連濁しているのは4つ) で、すべて ○○○ XXの「平板型」をとる。このことは、連濁する場合、または前部要素が2モーラの場合には平板型も許容するというを示唆している。

したがって、これら17の後部要素について「連濁が起こる・起こりやすい条件」をまとめると、以下の(16)のようになる。

(16) 連濁の生起する「複合した地名」の17後部要素での「連濁が起こる・起こりやすい条件」

- 1) モーラ数と漢字数： 1漢字、2モーラ (および3モーラ)
- 2) 語種： 和語 > 漢語 > 外来語
- 3) 複合する前に濁音が含まれるかどうか： 清音のみ (=濁音を含まないもの)
- 4) 後部要素初頭音：
 - *初頭子音：連濁を起こしうるか行 (k)、さ行 (s/sh)、た行 (t)、は行 (h) すべて可能
 - *その初頭子音に続く母音：[a]音が多い
- 5) 複合してできた複合名詞としてのアクセント型 (原則)：
 - 複合する前のもとのアクセント型にかかわらず、複合して連濁する場合、原則的に「語末から3モーラめの後ろ」にアクセントをとる
 - [cf. 5)は東京方言の外来語アクセント規則(窪田、1999:179-82)と共通している。]
- 6) 複合してできた複合名詞としてのアクセント型 (付則)：
 - 複合して連濁する場合、または前部要素が2モーラの場合には「平板型」も許容する

5)と6)は、(2)の5)でふれた「複合語化する時に連濁する場合、複合語のアクセントも1つにまとまる」ことを支持する結果である。

6. まとめ

1.で述べたとおり、複合語における連濁とアクセントという2つの現象の関係はあまり明らかにはなっていないし、普遍的な一般則を追求するのみならず、コンテキストによるある程度個別の語彙レベルの規則を考えることも必要である。(佐藤、1989)

本稿では、「複合した地名」というジャンルの固有名詞に限定して、その後部要素に着目して東京方言における「連濁」現象と「アクセントの変化」を観察し、

- 1) どんな条件の時に連濁が起こるのか、
- 2) アクセントとの関係はどのようになっているのか、

を調べた。これは、2つの現象の一般的関係を解明する一端となろう。

前部要素Aと後部要素Bが複合して複合名詞ABをつくるときに、「アクセントの変化」を伴って複合語アクセントとなる。(2)の5)でふれたように、「連濁」は、複合語化における不付加的な現象であるが、「連濁の生起する・しやすい条件」として(16)にまとめたようなものが考えられる。

「複合した地名」というジャンルの後部要素における「複合後のアクセント」の分布と「連濁の生起状況」は、完全に一致するわけではないが、傾向として類似していることが分かった。

複合後のアクセントについては、1漢字1モーラ、2モーラの後部要素にB型が優勢で、それ以外（外来語2モーラ、1漢字3モーラ、2漢字以上）は、ほとんどA型かA*型となっていた。また、連濁が起こっている17要素（67要素中、25.4%）はすべて1漢字2モーラもしくは3モーラの要素であったが、(13)でまとめたように、《複合してできた複合名詞としてのアクセント型（原則）：複合する前のもとのアクセント型にかかわらず、複合して連濁する場合、原則的に「語末から3モーラ目の後ろ」にアクセントをとる》という点でまとめることができる。

つまり、「複合した地名」の後部要素においては、主に1漢字2モーラで、複合する前に濁音を含まないもので、和語(もしくは和語らしい語)由来のものに連濁が起こりやすく、連濁した場合は原則的に「語末から3モーラ目の後ろ」にアクセントをとる、と考えられる。

後部要素の性質に焦点をあてたため、前部要素との関係については本稿では扱わなかった。前部要素がどのように「連濁の生起する・しやすい条件」に関わっているかは興味深い問題であり、今後の課題としたい。2つの現象の関係の全体像をつかむためには、他のジャンルや他の品詞の複合語でも詳しい調査を進める必要があろう。また、東京方言以外の様々な方言によってどのような特徴が見られるかも比較調査をする必要があろう。

注

1 一般的に共通語アクセントと呼ばれているものを、便宜上東京方言とした。東京方言の複合名詞の特徴が関西方言や他の方言に「あてはまるとは限らない」が、「単一のアクセント単位にまとまる」という複合語の特徴は日本語の諸方言にほぼ共通した特徴である(窪菌、1995:60)。

2 障害音ともいう。

3 一般的ではないが口語的な書き言葉の特殊な例で、ひどく驚いた時に出す「あ」の発声を、「あ!」や「あっ」だけでなく「あゝ」と書かれることがあるようだ。「あ」は母音のみから成り、もともと有声なのでさらに濁点をつけて有声化することはできないはずだが、この「あゝ」は、本来の驚きの「あ」を強く強調した発声を思わせる表記だろうと推測できる。

4 連濁現象と一般化の説明は、窪菌(1999:5-8)が詳しい。

5 「せき(関)」は、相撲力士の呼称として接尾語的に関取のしこ名につけて敬称とする場合、「〇〇ぜき」と連濁を起こすことが少なくない。[例：朝青龍関（あさしょうりゅう-ぜき）]

6 「洞」は慣用音で「どう」と読むが、本来は「とう」という音読みであるようだ。（「洞」、『三省堂漢和辞典』）

7 『三省堂漢和辞典』には、「原」は「はら」とは記載されているが、地名となる複合語後部要素としての読み「ーばら」、「ーばい」、「ーばる」は記載されていない。「ーばら」は「はら」の連濁したもの、「ーばい」と「ーばる」は「はら」の方言的なバリエーションであろう。

8, 10, 11, 12, 13, 15, 16 注7を参照。

9, 14 注6を参照。

参考文献

- 金田一 京助 他 編 1980 『三省堂 国語辞典』 第2版 三省堂
 窪菌 晴夫 1995 『語形成と音韻構造』 くろしお出版
 窪菌 晴夫 1999 『日本語の音声』 岩波書店
 黒川 伊保子 2004 『怪獣の名はなぜガギグゲゴなのか』 新潮社
 長澤 規矩也 編著 1980 『三省堂 漢和辞典』 第2版 三省堂
 NHK放送文化研究所 編 1998 『NHK日本語発音アクセント辞典』 新版 日本放送出版協会
 西野 博二 2001 「清音、濁音および連濁」 <http://www.asahi-net.or.jp/~va4h-nsn/rendaku.htm>
 佐藤 大和 1989 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」 杉藤 美代子 編『講座日本語と日本語教育2:日本語の音声と音韻(上)』 明治書院 233-265.
 上村 幸雄 1989 「五十音図の音声学」 杉藤 美代子 編『講座日本語と日本語教育2:日本語の音声と音韻(上)』 明治書院 41-63.

- Lyman, Benjamin Smith 1894 *Change from Surd to Sonant in Japanese Compounds*. Philadelphia: Oriental Club of Philadelphia.
- Otsu, Yukio 1980 “Some aspects of Rendaku in Japanese and Related Problems.” Yukio Otsu & Ann Farmer, eds. *MIT Working Papers in Linguistics: Theoretical Issues in Japanese Linguistics*, 2. 207-227.

謝 辞

『神戸言語学論叢(西光先生還暦記念号)』の刊行に際し、神戸大学で言語にまつわる様々な関心を寛容に見守り育ててくださった西光義弘先生に感謝の意を表したい。

付表： 分析対象となった67の「複合した地名」の後部要素 (50音順)

後部要素 (漢字)	後部要素 (読み)	モーラ数	漢字数	複合後の初頭子音	複合前の初頭子音	連濁	濁音の有無	アクセント型
海	かい	2	1	k-a	k-a	n	n	B
海峡	かいきょー	4	2	k-a	k-a	n	n	A
潟	がた	2	1	g-a	k-a	y	n	B
川	かわ・がわ	2	1	k/g-a	k-a	y/n	n	B; Flat, B
丘陵	きゅーりょー	4	2	ky-u	ky-u	n	n	A
峡	きょー	2	1	ky-o	ky-o	n	n	Flat
橋	きょー	2	1	ky-o	ky-o	n	n	Flat
区	く	1	1	k-u	k-u	n	n	B
郡	ぐん	2	1	g-u	g-u	n	y	B
溪	けい	2	1	k-e	k-e	n	n	B
溪谷	けいこく	4	2	k-e	k-e	n	n	A
溪流	けいりゅー	4	2	k-e	k-e	n	n	A
県	けん	2	1	k-e	k-e	n	n	B
湖	こ	1	1	k-o	k-o	n	n	B
越	こえ	2	1	g-o	k-o	y	n	Flat
公園	こーえん	4	2	k-o	k-o	n	n	A
高原	こーげん	4	2	k-o	k-o	n	y	A
鉱泉	こーせん	4	2	k-o	k-o	n	n	A
高地	こーち	3	2	k-o	k-o	n	n	A
崎	さき・ざき	2	1	s/z-a	s-a	y/n	n	B
埼	ざき	2	1	z-a	s-a	y	n	B
岬	ざき	2	1	z-a	s-a	y	n	B
山	さん・ざん	2	1	s/z-a	s-a	y/n	n	B
山塊	さんかい	4	2	s-a	s-a	n	n	A
山地	さんち	3	2	s-a	s-a	n	n	A
山脈	さんみゃく	4	2	s-a	s-a	n	n	A
市	し	1	1	sh-i	sh-i	n	n	B
支庁	しちょう	3	2	sh-i	sh-i	n	n	A*
島	しま・じま	2	1	sh/z-i	sh-i	y/n	n	Flat, B; Flat
州	しゅー	2	1	sh-u	sh-u	n	n	B
鍾乳洞	しゅーにゅーどー	6	3	sh-o	sh-o	n	y	A*/Flat
諸島	しゅーとー	3	2	sh-o	sh-o	n	n	A
水道	すいどう	4	2	s-u	s-u	n	y	A
関	せき	2	1	s-e	s-e	n	n	B
瀬戸	せと	2	2	s-e	s-e	n	n	A
山	せん・ぜん	2	1	s/z-e	s-e	y/n	n	B
平	たい	2	1	t-a	t-a	n	n	B
台	だい	2	1	d-a	d-a	n	y	B
台地	だいち	3	2	d-a	d-a	n	y	A
平	だいら	3	1	d-a	t-a	y	n	A
岳	たけ・だけ	2	1	t/d-a	t-a	y/n	n	B
谷	たに・だに	2	1	t/d-a	t-a	y/n	n	B; Flat
ダム	だむ	2	*	d-a	d-a	n	y	A
貯水池	ちよすいち	4	3	ch-o	ch-o	n	n	A*
島	とー	2	1	t-o	t-o	n	n	Flat
洞	どー	2	1	d-o	?d-o ¹⁴	n	?y	B
峠	とーげ	3	1	t-o	t-o	n	y	A
原	ばい	2	1	b-a	?h-a ¹⁵	?y	?n	B
橋	ばし	2	1	b-a	h-a	y	n	B
鼻	はな・ばな	2	1	h/b-a	h-a	y/n	n	B
岬	はな	2	1	h-a	h-a	n	n	B
浜	はま	2	1	h-a	h-a	n	n	B
原	はら・ばら	2	1	h/b-a	h-a	y/n	n	B
原	ばる	2	1	b-a	?h-a ¹⁶	?y	?n	B
半島	はんとー	4	2	h-a	h-a	n	n	A
平野	へいや	3	2	h-e	h-e	n	n	A

牧場	ぼくじょー	4	2	b-o	b-o	n	y	A
盆地	ぼんち	3	2	b-o	b-o	n	y	A

¹ 一般的に共通語アクセントと呼ばれているものを、便宜上東京方言とした。東京方言の複合名詞の特徴が関西方言や他の方言に「あてはまるとは限らない」が、「単一のアクセント単位にまとまる」という複合語の特徴は日本語の諸方言にほぼ共通した特徴である」(窪菌、1995:60)。

² 障害音ともいう。

³ 一般的ではないが口語的な書き言葉の特殊な例で、ひどく驚いた時に出す「あ」の発声を、「あ!」や「あっ」だけでなく「あゝ」と書かれることがあるようだ。「あ」は母音のみから成り、もともと有声なのでさらに濁点をつけて有声化することはできないはずだが、この「あゝ」は、本来の驚きの「あ」を強く強調した発声を思わせる表記だろうと推測できる。

⁴ 連濁現象と一般化の説明は、窪菌(1999:5-8)が詳しい。

⁵ 「せき(関)」は、相撲力士の呼称として接尾語的に関取のしこ名につけて敬称とする場合、「〇〇ぜき」と連濁を起こすことが少なくない。[例： 朝青龍関 (あさしょうりゅう-ぜき)]

⁶ 「洞」は慣用音で「どう」と読むが、本来は「とう」という音読みであるようだ。(「洞」、『三省堂漢和辞典』)

⁷ 『三省堂漢和辞典』には、「原」は「はら」とは記載されているが、地名となる複合語後部要素としての読み「ーばら」、「ーばい」、「ーばる」は記載されていない。「ーばら」は「はら」の連濁したもの、「ーばい」と「ーばる」は「はら」の方言的なバリエーションであろう。

⁸ 注7を参照。

⁹ 注6を参照。

¹⁰ 注7を参照。

¹¹ 注7を参照。

¹² 注7を参照。

¹³ 注7を参照。

¹⁴ 注6を参照。

¹⁵ 注7を参照。

¹⁶ 注7を参照。